



八戸火力発電所Ⅱ1974（昭和49）

年9月25日・

青森県史編さん資料

「先生、ホヤだったらお好きなほど出します。その代り、私達に電気を下さい」

これは戦後、臨海工業都市の建設をめざす八戸市が、工業の動力源となる電力を確保するため、当時電力業界の実力者で「電気の鬼」のニックネームを持つ松永安左衛門に芸者が訴えた一言である。

松永は八戸市に招かれた

## 八戸火力発電所の建設

### 宮本利行

（青森県史編さん執筆協力員）

宴会で、初めて食べたホヤが気に入り、おかわりを所望した。このとき彼は電力の安定供給が工業都市八戸の発展の鍵を握っていることに、八戸市の政財界ばかりでなく、芸者も訴えるほどの関心事になっていることを知った。

八戸市は、戦前から馬淵川河口部（通称三角地帯）を工業造成地にしようとした、第2代八戸市長神田重雄の構想に基づき企業誘致

に取り組むが、電力の供給不足がネックとなっていた。十和田湖を源流とする奥入瀬川に建設された立石、法量両水力発電所などからの電力では足りず、東北電力に対して盛岡―八戸間に15万ボルト送電線の建設を求めたのである。

1955（昭和30）年、東北電力は八戸市への火力発電所建設を表明した。松永安左衛門が、自らが責任を有する電力中

央研究所の電力設備近代化調査で、建設費が膨大な水力発電に比べ、安価な火力発電所の建設を進めるべきと報告したからだった。

これは東北電力が火力発電の導入で「火主水従」へと事業方針を転換したことの意味した。建設候補地には八戸市の他、福島県の名浜町、山形県の山形市も上がっていたが、発電の動力源となる北海道の石炭輸送の便から八戸市が最適地とされた。

1956（昭和31）年、八戸火力発電所は三角地

帯へ建設されることになり、用地売却協定が結ばれた。建設工事はこの年の9月から始まり、1958（昭和33）年6月に操業開始となった。火力発電所建設で電力供給が保障されると、日曹製鋼（現太平洋金属）の誘致が実現する。

この企業は砂鉄を原料とし、電気炉による砂鉄銑を生産していた。そして砂鉄が豊富に埋蔵する八戸地域の鉄鋼業の中心的企業として、工業港の対岸で操業する日東化学工業や日本高周波鋼業とともに臨海工業地帯を形成することになる。

ちなみに「私達に電気を下さい」と訴えた芸者の「才蔵」は、八戸屈指の人氣芸者だった。芸者たちは政財界の顧客を接待するため、政治や経済の話題に明るいことが必要とされていた。才蔵もそうだったことは容易に想像できよう。

なお、八戸火力発電所の建設は、今年県が刊行する『青森県史通史編3 近現代 民俗』でも取り上げた。この機会に読んでいただければ幸いである。